

令和5年度 独立行政法人日本スポーツ振興センター新博物館展示・運営に関する有識者懇談会
(第1回) 議事要旨

1. 日時 令和5年11月6日(月) 14:00~15:30

2. 場所 独立行政法人日本スポーツ振興センター 外苑事務所

3. 出席者

・委員

荒木絵里香委員、池口徳也委員、大林太朗委員、沓沢博行委員、栗原祐司委員、
黒川仁美委員、建石徹委員、田良島哲委員、萩原恒昭委員、町田樹委員(オンライン)
(計10名)

・事務局

JSC 大西(啓) 理事、須藤館長、新名学芸員、木村学芸員、寅ヶ口施設部企画調整役

・陪席

株式会社丹青社(5名)、JSC 施設部(2名)、JSC 博物館(4名)

4. 議事内容

(有識者懇談会の設置について)

事務局より資料1および資料2について説明があった。また、委員互選により栗原祐司委員が座長に選任された。

(議題(1) 新博物館の概要説明)

事務局より資料3、資料4、資料5、参考資料3について説明があった。

(議題(2) 限られたスペースを活用した新博物館の運営方針)

①収蔵庫の面積想定について

事務局より資料6について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。

○限られたスペースでいかにデジタル技術の特性を活かすかがポイントになる。実物と仮想を組み合わせながらスポーツの素晴らしさを伝える必要がある。

○当面は船橋倉庫などを併用し、研究分野において貴重な資料を活用できる施設を維持していただきたい。

○都心に展示と収蔵スペースを一緒に確保するのは困難であり、収蔵スペースを別に持つことは許容される話であろうと思う。スポーツ博物館の資料は他に代えのないもので長期的保存が絶対に必要であるが、収蔵庫を離すと実務的な運用が輸送面で難しくはなる。

○収蔵品は基本的に減ることがない。増え続けるコレクションを収蔵するためには別の場所を確保するしかなく、どの博物館も苦勞している。地方で廃校になった校舎や空いた保育施設

などを探す努力もしていただきたい。

- 博物館が収蔵する石油製品やゴム製品、サイン入り、重要な使用痕などがある資料の保存に耐えるスペシャルな収蔵庫を念頭に置き、検討を進める必要がある。収蔵品を動かせるか否かということも収蔵庫管理では重要。
- 収蔵品を破棄するという選択肢はないと考えている。図書閲覧室がないことについては検討が必要。

②来館者ターゲットの想定について

事務局から参考資料1の説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。

- 選手生活では競技とトレーニング中心で博物館などに足を運ぶ機会がなかった。オリンピックミュージアムを閲覧したときに自分の子どもに見せたい、一緒に行きたいと感じた。まずは、こうしたきっかけを作ることも重要ではないか。ターゲットに対し、アスリートからもプラスアルファとなる発信ができるとよい。
- 一般の観光客のほか学校団体利用が多い博物館では、小学校の郷土学習や歴史の授業に関連し、教科書にも照らし合わせ、見ていただけるような展示をしている。博物館で学校団体を誘致する場合は、授業など具体的な利用に結び付く展示を提案していく必要がある。団体に対し駐車スペース、待機スペースも必要で、施設全体として、どう対応するかを考えていけるとよい。
- 学校団体の見学ではバスが止められるか、昼食の場所があるかという二点の有無で集客に影響がある。ラグビーフットボール協会のご協力を得ながら、試合前にトップアスリートの選手による説明、OB・OGのゲーム解説を行うなど、さまざまな形で協働できるのではないか。
- 『秩父宮記念スポーツ博物館展示基本計画』(p.16)にあるコンセプトの再定義をベースにすると、すべての方が対象ということになり、あえてターゲットを絞る必要はないように思う。特定の来館者を想定したいときにターゲットを絞ればよいのではないか。
- 博物館のコレクションとして何を見せたいのか整理しておいた方がよい。その後、想定する来館者に対し、博物館として展示室での対応とそれ以外の対応について、どの手段でアプローチしていくか整理しておいた方がよい。懇談会では、アスリート自身が何をみせたいのかというご意見も伺いたい。
- デジタル技術の活用により、全て展示しなくてもスマートフォンなどで見ることができる。多言語や子ども向けのキャプションなどはQRコードで読み込める。展示面積が狭いがゆえに、そうした技術を活用することも検討いただきたい。

会議閉会に際して、事務局から第2回有識者懇談会は令和5年12月中の開催で日程調整を行うと事務連絡があった。

(以上)